

A・MUSEUM

vol.89
[2016.12.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



筑波山とその湧水を利用した稲作(つくば市臼井)

ジオパーク 筑波山地域の自然と人々とのかかわり

9月9日、筑波山地域が日本ジオパークとして認定され、新たに「筑波山地域ジオパーク」としての活動がはじまりました。

筑波山地域とは筑波山塊から霞ヶ浦に至る6市のエリアのことで、日本百名山の1つである筑波山を中心とする山地部と、日本第2位の湖面積をもつ霞ヶ浦、これらをつなぐ平野部から構成されています。筑波山は、中生代末ごろに地下でのマグマの活動が造り出した斑れい岩や花崗岩が長年の風化・侵食で残された山で、その麓では豊かな湧水が稲作や酒造業などの地場産業を育んでいます。

ジオパークはユネスコの事業で、教育・保全・観光を主軸として地域の持続的な発展を促す取り組みです。当館も、この活動に教育・学術分野などの面から参画しています。(教育課 小池 渉)



筑波山の岩石についての観察会(がま石付近)

**第68回
企画展**

アンモナイト・ワールド – 恐竜時代の海へいこう –

The World of Ammonites: Mysterious Creatures of the Mesozoic Oceans

「アンモナイト」と聞くと、多くの人がすぐに渦巻きの形をした姿を思い浮かべるといいます。古生物の中でも恐竜と肩を並べるくらい知られているグループです。図鑑や教科書にも登場し、はるか昔に絶滅してしまったアンモナイトのことをたくさんの方が知っています。しかし、どのような生物だったのかと聞かれると明確な答えを出せる人は少なくなります。カタツムリなどの巻貝のなかまだと考えている人も多いのではないのでしょうか。アンモナイトは、名前は広く知られていますが、詳しいことはあまり知られていない古生物の1つです。

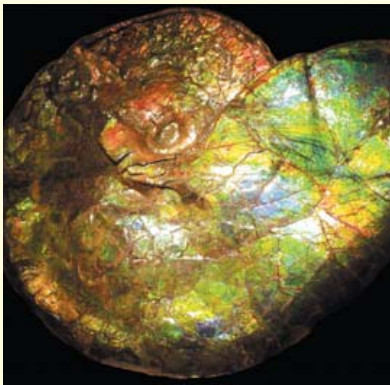
アンモナイト化石を縦に切断して内部の構造を調べると、いくつもの部屋に分かれていることが分かります。巻貝のなかまには同じような構造がないため、殻の特徴を見るとまったく違う生物ということが分かります。では、どのような生物のなかまなのでしょう。そのヒントは現生のオウムガイの殻にあります。オウムガイの殻の内部もアンモナイトと同じ構造をしています。オウムガイは頭部から足が生えている「頭足類」というグループです。このグループにはイカやタコが含まれます。このことからアンモナイトはイカやタコのなかまであることが分かります。

アンモナイトは、多くの研究者や化石愛好家によって化石が採集され、研究が進められてきました。その研究の歴史は約200年におよびます。現在も毎年のように新しい発見があり、徐々に生物としてのアンモナイトの姿が分かってきました。

本企画展では、日本や世界で産出するさまざまなアンモナイト化石を通して、その多様性を紹介します。さらにどのような生き方をしていたのか、どのように進化してきたのかなど、最新の学術的知見を取り入れながら紹介します。本企画展を通して、生物としてのアンモナイトを知り、地球上でくり広げられる生物の絶滅と進化の歴史について一緒に考えていけたらと思います。
(教育課 相田裕介)

展示構成

- 第1部 中生代の海
- 第2部 日本のアンモナイト
- 第3部 世界のアンモナイト
- 第4部 アンモナイトの基礎講座
- 第5部 化石の発掘
- 第6部 アンモナイトの形態
- 第7部 アンモナイトの系統と進化
- 第8部 絶滅と生態系の回復



虹色に輝くアンモナイト
(所蔵: 株式会社ナカバヤシサービス) ディスカス



ひたちなか市で産出したアンモナイト「バキ」 中生代の海に生息した首長竜「タラソメドン」
(所蔵: 三重県総合博物館)



会 期 2017年2月18日(土)～6月11日(日)

2月18日(土)は午後1時からの公開となります。

開館時間 9:30～17:00 (入館は16:30まで)

休 館 日 毎週月曜日

※3月20日(月)は開館し、翌日が休館となります。

●自然講座 アンモナイトのなぞ
—絵を描きながらアンモナイトについて学ぼう—

日 時: 3月25日(土) 13:30～15:00

講 師: 重田康成氏 (国立科学博物館)

場 所: 博物館内

対 象: 小学生以上 (小学生は保護者同伴)

定 員: 40名 (事前申込み・先着順)

●自然観察会 アンモナイトを見つけにいこう

日 時: 5月21日(日) 10:30～14:30

場 所: いわき市アンモナイトセンター (現地集合)

対 象: 小学生以上 (小学生は保護者同伴)

定 員: 30名 (事前申込み・抽選)

●自然講座 アンモナイトとその仲間たちの自然史

日 時: 5月27日(土) 13:30～15:00

講 師: 棚部一成氏 (東京大学名誉教授)

場 所: 博物館内

対 象: 中学生以上

定 員: 30名 (事前申込み・先着順)

博物館モニター

博物館の広聴活動 3

博物館の広聴活動シリーズの第3回は、博物館モニターについてです。

○博物館モニター制度とは

公募により選任された博物館モニターに、企画展や企画展期間中に行われるイベントへの意見や提案などをいただく制度で、2001年から実施しています。博物館モニターには、ご意見用紙へ記入し、それを提出していただいています。任期は2年間で、一度に限りさらに2年間継続することができます。現在51名の市民モニターと58名の県職員モニターの合計109名の博物館モニターにご協力いただいています。今回の募集は県職員モニターが2017年5月、市民モニターが2018年5月となっています。

○博物館モニターの特典

博物館モニターは、登録期間中は無料で入館していただけます。また、博物館モニターの家族も同伴者として来館できるように年3回の企画展ごとに無料観覧券を送付しています。さらに、モニター活動に必要な情報やホットなイベント情報などを随時お送りし、イベントのPR方法などについてもご意見をいただいています。

○博物館モニターの意見から

博物館モニターからいただいた第66回企画展「モンゴル・ステップ・大草原」(会期は9月に終了しました)に関する意見の中から、いくつか紹介させていただきます。

・モンゴルへの現地調査について、気候のよい夏だけでなく、厳冬期に調査したことにとっても感心した。展示に深みを出していたと思う。

・折しも、NHKの番組でガゼルの特集があり、気候変動がステップに生息するガゼルにも大きく影響しているようすが紹介されていたが、放送内容のほとんどは展示解説書に収録されており、企画展の内容はNHKの

特集と比べても遜色がなく、最先端の研究成果が展示されていたと感じた。企画展では毎回しっかりとした展示解説書が準備されており、担当者の意気込みを感じた。

・企画展会期の最終日にモンゴルの食文化についてのイベントが開催され、試食できてよかったが、このようなイベントが会期中に何回もあるとさらによかったと思う。

博物館モニターからは、企画展に関する意見のほかにも、常設展に関する事、企画展以外のイベントに関する事、館内施設・サービスに関する事、ショップ・レストランに関する事、野外施設に関する事、広報・広告に関する事など、いろいろな意見をいただいております。また、お褒めの言葉や喜びの言葉をいただくことは、何よりも担当職員の励みになっております。

このような博物館モニターの協力により、当館では継続的に利用者の立場からの意見とその動向を把握するよう努めてまいりました。今後も博物館モニターの意見や提案などを真摯に受け止め、当館がさらに発展できるよう改善していきたいと思っております。

(企画課 松浦卓也)



企画展オープニングセレモニーで紹介される博物館モニター

キノコとコケ

秋は茸の季節です。私の生まれた岐阜県では、「キノコ」のことを「コケ」とよびます。方言といえはそれまでですが、明治以前から長年地域で使われてきたよびなので、私は今でも「コケ」の方が馴染みがあります。明治のはじめに設立された博物館の役割の1つは、自然物の名前を統一することでした。国立科学博物館の前身の教育博物館では、このために動植物や岩石・鉱物の標本セットを学校に配布していました。

この時代の文献に「ジャリ」も「マサゴ」も「砂(スナ)」とよびましょうと書かれたものもあります。

子供のころに、集落全員が集まり、ウサギを山から「ぼって」、捕まえていました。「ぼって」は、「追う」ことです。童謡「ふるさと」という歌に「ウサギ追いしかの山」とありますが、長い間「ウサギは美味しい」と解釈していました。皆さんも、誤解している言葉があるのではないのでしょうか？

館長コラム by director YOKOYAMA



イラスト：池上侑花（ミュージアムコンパニオン）

9.10関東・東北豪雨菅生沼で起こっていたこと

研究報告 1

2015年9月の関東・東北豪雨から1年3か月が経過しました。鬼怒川の堤防が決壊した9月10日の菅生沼では水位が約4m上昇し、ふだん陸が見えているところもすべて水没しました。

常総市側の菅生沼下流部には、絶滅危惧種に指定されているタチスミレの生育地があり、毎年1月に野焼きを行ってタチスミレの生きる環境を守っています。ちょうどこの年、筑波大学の西平貴一さんたちのグループが、野焼きを行っているこの場所で植物の季節変化を詳細に調査していました。その時、この豪雨が発生し、調査地は5日間から場所によっては10日間水没しました。

野焼きを行うことは、タチスミレなど湿地に生育する絶滅危惧種にとって、種子の発芽を促す効果があるといわれています。また、増水や洪水が起こることは、競争相手となる植物の増殖を抑える効果があるといわ

れています。タチスミレにとっての野焼きの効果は計画的に調査することはできませんが、いつ起こるか分からない豪雨の影響についての調査計画は立てようがありません。その観点から、今回の豪雨は、増水が植物に与える影響を調べるまたとない機会となりました。

そこで、菅生沼のタチスミレ生育地で絶滅危惧種の保全に関係する植物を何種類か選り出し、絶滅危惧種、外来種、在来の優占種に着目して、豪雨前の7月と豪雨後の9月の生育状況の変化を見てみました。まず、絶滅危惧種のタチスミレとホソバイヌタデは、増水前後で生育状況に大きな変化はありませんでした。タチスミレでは、水が引いた9月下旬には泥が付着している葉とともに新たに成長した泥の付着していない葉が確認されました。外来種のセイタカアワダチソウとオオブタクサは、増水後に生育個体が大きく減少し、多くの枯死個体が確認されました。在来の優占種であるオギやヨシは、増水の前後でほとんど変化はないが、わずかに個体数を減らしていました。この結果から、タチスミレなどの絶滅危惧種は、増水に耐える性質を備えており、競争相手となる外来種の繁殖は増水により抑えられていることが推定されました。

(企画課 小幡和男)



増水時(左: 9/10)と平常時(右: 10/27)の菅生沼のタチスミレ生育地周辺



増水後のタチスミレ(泥の付いた葉とともに泥の付いていない葉が見える)



枯死したセイタカアワダチソウ(同じところに生えていたオギはほとんど枯れていない)

骨からわかるクジラの昔

クジラが昔、陸を歩いていたことはご存知ですか。クジラの祖先はもととも陸上で四足歩行をしていました。その祖先が進化の過程で、水中生活するようになり、現在、海でみられるようなクジラが誕生しました。そのため、クジラの骨格には陸上で暮らしていたときの名残がみられます。

胸ビレには前足だったときの指の骨が残っています。しかし、尾ビレにはありません。尾ビレは尻尾が変

化したものだからです。では、後足はどこにあるのでしょうか。クジラの腹部後方には寛骨という2本の小さな骨があります。これは後足を支えていた骨盤の名残です。後足は水中生活には必要なかったため、退化し、現在ではこの骨だけが残っています。

当館にはさまざまなクジラの骨格標本があります。ぜひ足の名残を探してみ

ください。

(ミュージアムコンパニオン 白石 准)



ミンククジラとその寛骨(白枠内)

茨城県におけるヌマガエルの分布状況

研究報告 2

ヌマガエルは、国内では本州中部以西、四国、九州、奄美諸島、沖縄諸島などの水田や沼に生息するヌマガエル科のカエルです。本種は近年、国内外来種として、従来の生息地以外への分布拡大が報告されており、在来種との競合が懸念されています。関東地方では栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県から多く報告があり、特に、北関東を流れる利根川や渡良瀬川周辺での報告が多数を占めています。しかし、茨城県で本種の生息が確認された報告はごく少数です。そこで当館では、利根川が流れる市町を中心に、ヌマガエルの生息状況を把握するため、カエル類を対象とした生息調査を行いました。また、2015年9月10日に堤防が決壊した鬼怒川周辺でもヌマガエルの生息調査を行いました。

まず、県内の利根川と鬼怒川が流れる14市町の水田およびその周辺において現地調査を行いました。調べたのは古河市、猿島郡五霞町、猿島郡境町、坂東市、守谷市、取手市、北相馬郡利根町、稲敷郡河内町、稲敷市、潮来市、神栖市、常総市、下妻市、結城郡八千代町です。次に、これまで当館と栃木県立博物館で収集されているヌマガエルの標本や画像のデータを整理

しました。

現地調査と博物館に収集されている資料の調査から、利根川が流れる8市町（古河市、猿島郡境町、坂東市、守谷市、北相馬郡利根町、稲敷郡河内町、稲敷市、神栖市）から21個体のヌマガエルの標本が、2市町（猿島郡五霞町、取手市）から画像情報が得られました。一方、鬼怒川周辺の調査では、利根川の合流地域である守谷市と常総市で7個体の標本が得られましたが、下妻市と結城郡八千代町では確認できませんでした。

本調査では、利根川が流れる茨城県の全市町においてヌマガエルが確認され、県内においても利根川周辺に広く分布していることが明らかになりました。このことから、ヌマガエルは、利根川を介して分布を拡大していると考えられます。一方、鬼怒川周辺では、利根川との合流地域でヌマガエルが分布しているものの、合流地域の上流側では生息は確認されず、現時点では鬼怒川の上流方向への分布は拡大していないと考えられました。今後は、県内の利根川に流れ込んでいる宮戸川や小貝川、常陸利根川などの河川や利根川から流れ出ている水路をたどりながらヌマガエルの生息調査を実施し、分布の実態を把握していく必要があると考えられています。（教育課 潮田好弘）



茨城県の利根川流域と鬼怒川流域のヌマガエルの調査地点



神栖市矢田部で確認したヌマガエル

「水の生き物コーナー」お休みのお知らせ

川の upstream から downstream まで海までの多種多様な魚たちが泳ぐ「水の生き物コーナー」が、2017年1月～3月の間、老朽化したろ過設備の交換工事のため、お休みさせていただきます。水槽展示を楽しみにいただいているお客様には、大変ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解くださいますようお願い申し上げます。

工事期間中は、水の循環が止まってしまうため、魚たちを水槽で展示することができません。そのため、

しばらくの間ですが、魚たちにはアクアフード茨城県大洗水族館に引っ越しをしてもらうことになっています。4月には博物館に戻って来ますので、また皆さまに元気に泳ぐ姿を見ていただくことができると思います。

魚たちが引っ越しをしている間は水槽が空になってしまいますが、魚たちのいない水槽を利用したイベントも準備しておりますので、ご期待ください。（資料課 土屋 勝）

おさかな通信



大型のろ過タンクがならぶバックヤード

ダンクルオステウス

新展示紹介

当館の第2展示室入口付近に、9月10日から新しい展示物が登場しました。この展示物は「ダンクルオステウス」という絶滅した魚類（板皮類）の復元模型です。模型の大きさは実物大で、全長約6mもあります。

ダンクルオステウスの化石は、北アメリカや北アフリカのデボン紀後期の地層から発見されています。体の前半部は硬骨質の板で覆われており、強力に発達したアゴで獲物をしとめる当時の生態系における頂点捕食者だったと考えられています。口のとがった歯のように見える部分は歯ではなく、アゴの骨板が鋭くなったものです。

ダンクルオステウスの骨格は化石に残りにくい軟骨性であったため、体の後半部についてはほとんど情報がありません。そのためこの復元模型では、保存のよ

い近縁種の化石から体の後半部を推定して製作しています。第2展示室の古生代のコーナーでは、ダンクルオステウスの骨板の一部の実物化石が展示されているほか、ユウステノプテロンなど、デボン紀の魚類の実物化石が多数展示されています。その中でも、コッコステウスはダンクルオステウスと同じ板皮類に属する魚類で、ダンクルオステウスの体の後半部を復元するときに参考にされる化石種の1つです。

ダンクルオステウスの模型がある場所はさっそく記念撮影場所として、来館される皆さまの人気スポットとなっているようです。当館でダンクルオステウスの復元模型をご覧になった際は、ぜひ第2展示室にあるコッコステウスなどの化石標本と見比べてみてください。（資料課 加藤太一）



ダンクルオステウスの実物大復元模型



ユウステノプテロンとコッコステウスの実物化石

今年のスーパームーンは68年ぶりの大接近

なるほど博物館

このコーナーは、自然に関するさまざまな情報をわかりやすくお伝えするコーナーです。

11月14日はスーパームーンの当日でしたが、関東付近は雨で見られず残念でした。スーパームーンという用語は、占星術師のリチャード・ノル氏が1979年に「軌道中で地球に最接近した新月または満月。即ち、地球と月と太陽が直線上に並び、月が地球に最も接近した状態」と定義しました。月は地球の周りを公転していますが、その軌道が楕円形であるため地球と月の距離は変化しています。そのため視直径（月の見かけの大きさ）も、地球との距離が近いときには大きく、遠いときには小さくというように変化します。2016年最も小さかった満月は4月22日で視直径は29.4分角（角度の単位：60分＝1°）、11月14日の視直径は33.5分角と約4分角も違い、並べてみると一目瞭然です。スーパームーンは最小の満月より14%も大きく見えるのです。

天文イベントとしてすっかりおなじみになったスーパームーン。特に2014年はスーパームーンの当たり年ともいわれ、年に3回も見ることができました。今年は1回だけですが、この日の月と地球との最短距離は356,511 kmで、1948年1月26日以来、68年ぶりの

大接近でした。平均距離は約38万kmなので、かなり接近したわけです。今後の予定はというと、2017年はシャイムーンイヤーといい、スーパームーンが見られない年になります。しかし、シャイムーンイヤーの翌年、2018年のスーパームーンはなんと1月2日です。おまけに最短距離も356,570kmとかなり接近します。まだまだ先のことですが、いい初夢が見られそう待ち遠しいですね。（資料課 諸橋靖子）



満月の大きさをくらべ

（撮影：国立天文台）

トピックス

○みんなで砂金さがしに挑戦！

茨城県北部の久慈川流域で今でも砂金がとれることをご存知でしょうか。自然博物館では11月6日(日)に久慈川支流の大沢川で自然観察会「砂金さがしに挑戦しよう」を開催しました。

大沢川の最上流域には栃原鉱山や塩沢鉱山などの金鉱山跡があり、その下流域では砂金をみつけることができます。参加者は砂金さがし用の「パンニング皿」を使い、とても比重が大きい砂金の性質を利用した「比重分離」という方法で砂金を探しました。まず、川岸の岩のすき間に詰まっていたり、草の根に引っかかっていたりする土砂をパンニング皿に山盛りにとりまします。次に、水中で土砂を皿の縁に沿って回転させるように皿を動かして、比重の軽い砂粒を少しずつ流し出していきます。すると、やがて比重の重い磁鉄鉱などからなる黒い砂だけが残るようになります。この黒い砂を皿の中に広げてじっくり探します。キラッと黄金色に輝く砂金の粒をみつけたら、歓声が上がります。

今回の自然観察会では29名の参加者が砂金さがしに熱中してそれぞれ小さな砂金をみつけました。みつかった砂金は最大2～3mmほどでしたが、ここにはまだまだ大きな砂金がありそうです。(教育課 小池 渉)



砂金さがしに熱中！？

○とんぼの池の「池干し」を実施中！

池の水と緑の再生を目指して、現在、とんぼの池の「池干し」を実施しています。

11月19日に予定していましたが悪天候のため中止になってしまいましたが、博物館職員やアクアワールド茨城県大洗水族館のスタッフ、茨城大学・筑波大学の学生、ボランティアの方々の協力によって、冷たい雨の降る中、外来生物を捕獲する作業が行われました。

スタッフ全員が泥だらけになりながら、コイやゲンゴロウブナ、ブルーギルなどを捕獲しました。これらの外来魚は合計220kgにもなり、なかには1mを超えるハクレンなども捕らえられました。一緒に混獲されたモツゴ、エビや貝のなかまなどの在来生物について

は、一旦、博物館内の水族館施設に保護し、再びとんぼの池に放流する予定です。

池干しは、池底を完全に乾燥させるため、来年の春まで行います。(資料課 土屋 勝)

(本活動は『公益信託「エコーいばらき」環境保全基金」および『公益財団法人自然保護助成基金第27期(2016年度)プロ・ナトゥーラ・ファンド』の助成を受けています。)



刺し網を使って魚を追い込む

○水防災意識社会再構築啓発活動について

10/8(土)～11/25(金)に、当館にて水防災意識社会再構築啓発パネルを展示しました。この展示は、国、県、沿川市町で構成する「鬼怒川・小貝川下流域大規模氾濫に関する減災対策協議会」が水防災を意識する社会を構築するよう取り組んでいる普及・啓発活動の1つです。

また、この活動の一環として11月13日(日)茨城県民の日に、当館にて国土交通省関東地方整備局下館河川事務所による出前講座「台風接近！そのときあなたは？」を開催しました。この講座では、台風接近時にとるべき行動をワークショップを行いながら学ぶことができました。

パネル展示のアンケートによると、「展示を見て、豪雨災害に対して自分で何かやってみようと思った」という意見が多く見受けられました。お客様の防災意識の高揚と防災知識の向上に貢献でき、非常に有意義な展示となりました。(企画課 松浦卓也)



出前講座「台風接近！そのときあなたは？」のようす

ありがとう恐竜 22年間はたらき続けたロボットたち



第2展示室「恐竜たちの生活」の全体像（左にティラノサウルス 右にランベオサウルスの親子 中央奥にドロマエオサウルスの尾が見える）

当館の第2展示室の「^{きょうりゅう}恐竜たちの生活」のコーナーは、大型の恐竜が生きていたころの情景を再現したジオラマ展示です。ここに配置されている動く恐竜のロボットは20年以上の稼働によって老朽化し、ここ数年で重大な故障が相次ぐようになりました。また、恐竜研究が近年めざましく進展したため、当館の恐竜ロボットは古い学説に基づいた時代遅れの復元になっていました。そこで、2017年春に「恐竜たちの生活」の大幅リニューアルを行います。

リニューアル工事は2017年1月17日から同年3月17日まで行われる予定です。来館者の皆さまにはご迷惑をお掛けしますが、何卒よろしく願いいたします。今までの恐竜ロボットはティラノサウルス1体、ドロマエオサウルス3体、ランベオサウルス親子3体でしたが、これらは老朽化のため撤去されます。新しく設置される恐竜ロボットは、ティラノサウルス親子2体、トリケラトプス1体の計3体です。今までの恐竜を見ることがで

きる期間はもう僅かです。工事がはじまる前にぜひ現在の展示をじっくりご覧いただきたいと思います。

今回のリニューアルにおいて、大きく変わるポイントの1つは「羽毛の有無」です。20年前は恐竜に羽毛があったとはほとんど考えられていませんでしたが、最新の研究ではティラノサウルス類やドロマエオサウルス類などのさまざま恐竜に羽毛が備わっていたことが明らかになっています。最新の学説を反映した新しい「恐竜たちの生活」のコーナーが、多くの皆さまに親しんでいただけることを願ってやみません。

（資料課 加藤太一）

編集後記

博物館からの帰り道、しっぽがしましまの動物が道を横切りました。外来生物の「アライグマ」です。動物園でしか見たことがなかった動物が今はこの辺りでも簡単に見られてしまう。なんだか複雑な気持ちになりました。皆さんも企画展を見て「外から運ばれて来た生き物たち」について一緒に考えませんか？（S. M）

【交通案内】



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- ＜鉄道・バスご利用の場合＞
- 東武アーバンパークライン（野田線）愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
- つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅
下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」
乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分

※事前に発車時刻等をご確認ください。



【開館時間】

9:30から17:00まで
（入館は16:30まで）
※ペット、遊具、テ
ブル、椅子及びテン
ト等のお持ち込みは
ご遠慮ください。

【入館料】

区 分	本館・野外施設		野外施設 のみ	年間 パスポート
	企画展開催時	通常時		
一 般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

（注）：（ ）内は団体料金（20名以上）です。
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。
次の日は入館料が無料です。

- 5月4日（みどりの日）
- 6月5日（環境の日）
- 11月13日（茨城県民の日）
- 3月20日（春分の日）
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
（ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。）

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※12月28日（水）～1月1日（日）は休館となります。
- ※1月2日（月）、1月3日（火）は開館します。
- ※1月9日（月）は開館し、翌日が休館となります。

